

## 夢物語 1

これは私が 2002 年に見た夢である。おそらくは常温超伝導が意識にあり、それが夢になっただけの荒唐無稽な物語だと思っていたが、後になってその意味が分かるのである。

水中に投じた鉛が、一瞬、重くなる現象を私は発見した。魚釣りに用いる鉛の重りを、釣り糸であるテグスでバネ秤につなぎ、鉛を水中に投じると、一瞬ではあるが秤の目盛りは、空中で示していた重量よりも重い値を示す。その直後、秤の目盛りは鉛が水から受ける浮力を受けて、空中での重量よりも軽い値で落ち着くのである。

この現象が長い間、見逃されてきたのは、秤の目盛りの変動は、鉛の慣性、つまり鉛を水に投じた時の反動によってもたらされると考えられていたからだろう。しかし、何度も慎重に行った私の実験では、明らかに鉛は水中で重くなっているのである。この現象を追求すると、鉛は、動いている水に対して反発力を生じることが分かった。つまり、こういうことなのだ。鉛を水に投じると、観察者の目から見ると鉛は重力に従い水中に沈んでいく。だが、鉛の立場からすると、自分は静止していて、水が上の方向に移動していることになる。このとき鉛には、自分に対して上向きに動く水に対する反発力が生じる。つまり、鉛には下向きの力が働くのである。

鉛に対して水が移動している限り、水に対する鉛の反発力は生じ続ける。ただ、テグスにつないだ鉛の実験では、テグスによって鉛の下方に向かう動きが止められてしまうため、一瞬重くなるだけで静止し、あとは水の浮力の影響を受けるだけとなるのである。まわりの水が静止していると鉛には反発力は生じない。反対に、まわりの水の動きが速ければ速いほど鉛の反発力は強くなる。だから、鉛の重りだけを水に投じた場合、鉛はどんどん加速しながら水底に沈んでいく。マリアナ海溝のような深い海の海面から鉛を落とすと、鉛は自ら推進力をつけながら海底を目指し、弾丸のような勢いで海底に激突するはずである。

動く水に対する鉛の反発力を、推進力に利用できないだろうかとは私は考えた。鉛を、水面に対して水平方向に投げ出してやると、水面に接した鉛には、鉛にとって後方に向かう水に対する反発力が生じ、鉛は投げだされた方向に加速しながら進んで行くはずである。もちろん鉛に働く重力によって鉛は下方へ引っ張られ、水平に投げ出された物体が放物線を描いて落下するように、最終的には下へ落ち、水底に激突するだろう。それを防ぐために、鉛をロケットのような形にして小さな翼をつけてやるのだ。この翼によって揚力が生じ、鉛が水没するのを防ぐのである。そうすれば、水平に投げ出した鉛が水との反発力によって前進し続ける限り、小さな翼は揚力を生み、鉛は水没することなく前進を続けるはずである。

さっそく私は試作機を完成させた。長さ 10 センチメートルほどのロケット形に成形した鉛の中ほどに、2 センチメートル角の翼を左右に張り出させたものである。ロケットの尾端にはテグスをつないでいる。テグスは、試作機の回収のためである。

実験場は淀川の河原である。河原には、ちょうどいい具合に大きな水たまりができてい

た。水たまりの端に立って、私は石で水切りをする時のように、ロケット形の鉛を、水面すれすれの位置から水平方向に勢いよく投げた。投げ出された鉛は水面に接触し、水しぶきをあげた。重い鉛に小さな翼をつけたぐらいでは、大気中では揚力など無視できるほど小さい。水面に接する瞬間まで、鉛は何の変哲もない金属のかたまりでしかなかった。ところが、ほぼ全体が水に浸かった状態から加速し始め、翼が生み出す揚力によって水面に浮上した。そして鉛の下半分を水に沈めた状態で前進を続けた。実験は大成功だ。

鉛につないだテグスは、すぐに伸びきってしまった。私の考えが正しいことを確かめるだけのつもりだったので、テグスは5メートルほどしか用意していなかったのだ。テグスの端を握っていた私の右手に鉛の重みを感じた瞬間、私の体は鉛に引っ張られて前進し始めた。足元が泥だったので滑ったのだろう。私は直立したまま、鉛のロケットに引っ張られ、水たまりの上を滑るように移動した。

水たまりの端で鉛は小石にはじかれ、水たまりから飛び出した。これで、私の実験は成功裏に終わるはずだった。ところが鉛は、私の体を引きずったまま、本流のヨシ原に飛び込んだ。鉛に引きずられているだけの私は「わっ」と叫んで、体にぶつかってくるであろうヨシの衝撃を待ちかまえた。ヨシの茎が目にも刺さったら一大事だ。私はきつく目を閉じてその瞬間に備えた。ところがまったく衝撃は伝わってこない。とっくにヨシ原に飛び込んでいていいはずなのだ。

私はおそるおそる目を開けた。するとどうしたことだろう、私の体は、素晴らしい速さでヨシ原の中を進んでいるのだ。ヨシ原の中に私の体がちょうど通れるだけの水路があって、右に左に蛇行しながら、飛ぶように進んでいる。まるでトンボになってヨシ原の中を飛翔しているような爽快な気分だ。密生したヨシ原の中なのに、私の体はまったくヨシにはぶつからない。鉛は、私の体が通れる場所を選んで進んでいるようにも思えてくる。

ヨシ原の中を飛翔する気分を存分に味わったころ、突如、目の前が開けた。ヨシ原から淀川の本流に出たのだ。そこは淀川の河口部だった。まるで水上スキーを楽しむように、広大な水面の上を、私の体は大阪湾に向かっていった。

接岸したたくさんの船が見えた。港だ。港に出入りするために行き交う巨大な貨物船の間を縫うようにして、私は海面を進んだ。水面に浮かんだ浮遊物の間を縫って疾走しているアメンボは、きっとこんな感じなのだろうと思った。

やがて前方に小さな島が二つ見えた。紀淡海峡に浮かぶ友が島だ。私は島の間を通り抜けた。太平洋に出たのだ。実験は大成功だ。わずか10センチメートルほどの鉛からでも、人ひとりを高速で移動させるだけのエネルギーを取り出せることを実証したのだ。私は、実験はこれぐらいにして引き返そうと思った。

ところが鉛は、沖へ沖へと進んでいく。引き返そうと思ってもいっこうにコントロールが効かない。考えてみれば、私はいっさい鉛をコントロールしてはいなかったのだ。ただ鉛に引っ張られていただけだったのだ。友が島を通り抜けるまでは、まるで自分の意志で進んでいるように錯覚していたのだ。

鉛はどんどん加速していく。すさまじい速度で進むので、風圧で振り返ることはできな

い。後ろは見なくても、もう陸地から遙か彼方に離れてしまったのは確かだ。どちらを向いても海しか目に入らないはずである。私は、ただ視線を前にやるか下に落とすかぐらいのことしかできない。前を見れば、5メートルほど先に鉛のロケットが静止しているように見えている。鉛はほとんど水面には接していないように見える。が、この推進力はわずかに接した水との反発力で生み出されていることに間違いはない。

水面は鏡のように真っ平らに見える。ただそれは、時速何百キロメートルという速度で進む鉛の、小さな翼が作り出す空気の流れによって平らにされているだけなのかもしれない。足元を見ると、私は裸足だった。水との摩擦によって靴を失ってしまったのだろうか。いや、最初から裸足だったような気がする。

私の足は水には接していなかった。私の足は前方の水面とほぼ同じ位置にあるのだが、足元の水面だけが10センチメートルほどえぐれるように窪んでいて、私の体は空中に浮いた状態なのだ。おそらく私の体に当たった空気の流れによって水面が押し下げられているのだろう。振り返って背後を見ることはできなくても、私の後ろの海面は激しく波立ち、上空高くまで水しぶきをあげているであろう事は感じられた。

空気との摩擦で大やけどを負ってもおかしくない速度なのに無事でいられるのは、私の体の周りの空気の流れによるものらしかった。ただそれは微妙なバランスによって保たれているだけで、いつ、そのバランスが崩れてもおかしくない状態だ。バランスが崩れれば、私の体は焼けこげてしまうかもしれない。今は空気の流れが、私の体に水滴がぶつかるのを防いでいるのだが、たった1滴水しぶきでさえ、この速度でまともにぶつかったら、弾丸のように私の体を貫通するだろう。

鉛につながったテグスを手放すことは、死を意味する。それは、疾走するレーシングカーから路面に飛び降りるようなものだ。コンクリートのような海面に激突した体は、ばらばらになってしまうだろう。私は自分の意志でテグスを握り続けているのではない。放したくても放せないから握っているだけなのだ。かといって、テグスを握り続けていても助かる見込みはない。どこかの島か大陸に到達したとしても、この速度で陸に突っ込んだらどうなるかは目に見えている。陸地に到達する前に、魚雷か何かと間違えられて、迎撃されるかもしれない。私が巻き上げている水しぶきは、すでにスパイ衛星などが確認しているかもしれない。だが、小さな鉛に人ひとりが引っ張られているのだとは誰も思うまい。

おそらく、陸地に激突することも、迎撃されることもないだろう。そうなる前に恐ろしい現象が待ちかまえているからだ。このまま加速を続ければ、音速を超えるのもそう遠くはない。音速を超えるとき衝撃波によって、体はばらばらになるだろう。あるいはその前に、空気との摩擦で燃え尽きているかもしれない。

こうなる前に、私はテグスを放すべきだった。友が島を通過するときに放していれば島まで泳ぎ着けただろう。いや、ヨシ原に突っ込んだときに放していれば泳ぐ労力さえ必要なかったのだ。いや、そもそもこんな実験をすべきではなかったのだ。だが、後悔してもどうにもならない。もう間もなく音速を超えそうだ。

この夢を見た4年後、2006年秋になって、夢の意味が分かった。

鉛は、ある人の心である。その人の心は、自ら推進力をつけながら、深みへ深みへと沈もうとする。少し力を貸すだけで、沈もうとする心は前向きに進むのではないだろうかと思は考えた。

少し力を貸せばという、安直な考えで人の心をもてあそぶものではない。もてあそぶつもりではないという言い訳は通らない。たとえ、いつ果てるともないすさまじい状況がおとずれようとも、体が燃え尽きようがバラバラになろうが最後までその状況を受け入れる覚悟がいるのだ。

その覚悟さえあれば、どんなすさまじい状況をも楽しむことができただろう。苦痛をも苦痛と覚えることはなかったに違いない。